

# 2012 年度入学試験問題 (3 - 2)

## 英語、国語

### 注 意 事 項

- (1) 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- (2) 出題教科目、ページ、および選択方法は、次表のとおりです。なお、国語の問題は、問題冊子の裏から見るようにページ建てされています。

教科	科 目	ページ	選 択 方 法
外国語	英 語	A 1 ~ A22	選択解答できる科目および選択方法は、志望学科・コースによって異なります。配付されている「受験生への注意」に従い、間違いのないようにして下さい。
国 語	国 語	B 1 ~ B27	

- (3) 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- (4) 解答用紙は、すべてマーク式解答用紙になっています。
- (5) マーク式解答用紙は、外国語（英語）と国語共通の様式です。
- (6) 解答用紙には、解答欄以外に次の記入欄があるので、監督者の指示に従って、それぞれ正しく記入し、マークしなさい。

- ① 解答科目欄（記入欄は表と裏の 2 箇所あります。）
- ② 志望学科・コース欄（記入欄はありません。マークのみしなさい。）
- ③ 氏名欄（マーク欄はありません。記入のみしなさい。）
- ④ 受験番号欄

- (7) 解答は、解答欄にマークしなさい。

例えば、10 と表示のある問いに対して、②と解答する場合は、次の（例）のように解答番号 10 の解答欄の②にマークしなさい。

（例）

解答 番号	解 答 欄
10	① ● ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

- (8) 試験時間中に退室する場合は、監督者に手を挙げて知らせなさい。

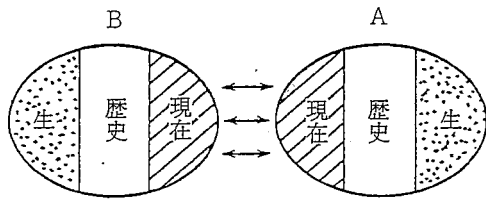
国語 (3-2)

注意事項

第2問は甲と乙に分かれています。甲は文学部日本語日本文化学科以外の志望者用、乙は文学部日本語日本文化学科志望者用です。必ず志望する学科用の問題を解答しなさい。(解答番号は、甲を選択した場合 1、乙を選択した場合 1)

23

第1問 次の文章を読んで、後の問い(問1〜10)に答えなさい。



理解すること、とりわけ人を理解することというのはどういうことなのだろう。ひとりの子どもあるいはひとりの友人を理

解する時、私たちはどうしても「理解」という様式を踏むことになる。そして「わかった」「よくわかったよ」「なんとなくわかるような気がする」といったような表現で相手を理解したことの度合いを言い現わしたりする。そもそも「理解」とはということなのだろう。

たとえば話を単純化するために上の図のようなことを考えてみる。Aなる人物が今Bなる人物のことを「理解」しようとしていると考えてみる。その時Aに見えるBの姿は斜線の部分である。それを「現在の姿」「今みえる姿」と仮りに呼んでおくことにする。AはBのその現在の部分だけをみてまずBという人物を理解するのである。おそらくそうした現在みえる部分だけをみてその当人を理解する様式があるにちがいない。それを今仮りに「第一の理解の様式」と名づけておく。

《人相》などというのはそういう理解様式で利用される材料である。人相をみて私たちはふつうこの人はやさしそうな人だとか、恐そうな人だとか、賢しこそうな人だとか、がん固そうな人だとか、判断

する。いわゆる第一印象とか呼ばれるものは、そういう理解様式に属する。むろん人相に限るわけではない。その人の喋り口調、服装、しぐさ、立ちイ振舞<sup>(1)</sup>などをみて、私たちはその相手のことを大まかに、しかしかなり決定的に「理解」してしまうのである。そういう理解の仕方を一括して第一の理解様式と呼ぶことにする。その様式に共通しているのは「現在みえる姿」を中心にしてその当人を理解するということである。

ところがAがBと親しくなり、Bの今まで暮してきたことのいくつかを知りはじめたとする。するとしだいにBの見方が変わってくる。Bのホホに傷があつて人相が悪いのは、若い頃ケンカした時の傷なのだが、そのケンカは複雑な家族構成の中で育ってきた中でおこした青年期特有のものであることがわかつてくる。そういうことがわかり出すと「悪い人相」としての理解の仕方が変わってくるのである。

生い立ちというか生活史というか、そういうその人の生きてきた歴史が具体的にわかることによって、その人の「現在の姿」をみる眼が変わってくるのである。この生いたちや生活史の部分を、ここでは単純に「歴史の姿」としておくことにする。そしてこの「歴史」を踏えて理解する理解の仕方を、仮りに「第二の理解様式」と呼んでおくことにする。

ふだん私たちが自分のまわりにいる人をどのように「理解」しているのかをふりかえつてみる時、この第二の理解様式で理解できていることが意外に少ないことに気がつく。たいていの場合、第一印象をごくごく断片的につなぎ合わせたかたちか、言わゆる人づてに聞いた評判（風のうわさ）でしかその人のかたちを理解していないことに気がつく。身近かな自分の両親や自分の配偶者のことですら、その生いたちや、その歴史については、十分なことを知っていないことに気がつくことがある。

むろん私はこの仮りに区別した第一の理解様式と第二の理解様式に、優劣の区別をつけようとしているわけではない。そうではなくて、およそ「理解」するという時には、経験的に分けてみて、この二つの様式がみられることをまず認めておこうとしているのである。

この場合だから第一印象はよかったのに、過去を知ることによって嫌なことがいっぱいみえてきて、結局のところ歴史を知ったがために「現在の姿」は悪いようにしかみられなくなるといったことも起ることは確かである。歌の文句ではないが「あなた<sup>(3)</sup>

の過去など知りたくないの」というところで理解されるものの真実も又あるからである。だから第一の理解様式と第二の理解様式に優劣をつけることはできない。

おそらく「現在みえるもの」の中に、すでにその人のもっている大事なもの（もってきた大事なもの）が十分現われていることも又確かである。逆にまた現在その人のもっているものは過去（歴史）の中でつくられてきたのも又確かである。だから過去を抜きにして、現在だけでその人を本当に理解することもできないし、その逆もそうであることはここで指摘しておかなくてはならない。

ところで私が今問いたいと思つてゐることは、一体ひとを「理解」するというのは、この二つの理解様式につきてしまふものかという点についてである。

極端にいえは「人相」としても、「歴史」としても登場しえない所で、その当人を「理解」している様式もあるのを感じるからである。たとえば赤ちゃんを抱いている母親をみている時、まだその赤ちゃんは「人相」と言つても他の赤ちゃんと似たりよつたりで、「歴史」と言つても数ヶ月で何の過去もないのに、母親はその子を「理解」している部分がある。それはその赤ちゃんが生命として、あるいは生として生きてゐるといふかたちにおいて理解している部分である。図ではそれを單純に「生の姿」と呼んでおきたいと思つた。

確かにこれは人に限らないものである。一輪の花をみて、一羽の鳥をみて、私たちが感動する時、それは形らしい形としては理解できないのに、「生の姿」への感動になつてゐることは確かである。私はそれを仮りに「第三の理解様式」と呼んでおきたいと思つた。

およそひとを「理解」するといふ時には、大きく分けてみて以上のような分け方が想定できるように私には思われる。だからどういふ様式でその人を理解するのかによつて、結局のところ理解される相手の位置づけられ方も違つてくることが理解される。この場合の第一第二第三の理解様式は、むしろ純粹にくつきりと分けられるものではなく、様々に重なり合つてゐるものだと思つた。特に第一の理解様式と第三のそれはある意味において似てゐるように見える。一輪の花をみて生を感じるのと、第一印象

でひと目ぼれするのでは似ている感じがあるからである。私はともあれ理念型としてこの三つをここでは区別しておきたいと思う。

そこからあらためて私は最初に問うた問いのことを問題にしてみたいと思う。つまり一人の人が人を理解するというのはどういふことなのかということについてである。今まではAなる人物がBなる人物のもつ三つの相の理解の仕方についてのべてきた。ところがAがBの三つの相を理解するというのは、AがA自身の三つの相を理解することを抜きにしては成り立たないことをそこから考えてみたいのである。

AがBの過去（生いたち、生活史）に気づくという時、おそらくA自身の中で自分に歴史があることを、そして自分がその歴史とともにつくられてきたことを感じる必要があるはず（6）（6）。つまりAがどういふ様式にしろBを理解している様式は、又AがA自身を理解している様式と重なっているところがあるからである。

だから「我身をつねって人の痛さを知る」の通り、自分を理解する様式が変れば変わるほど、人を理解する様式も又変ってゆくということが起り、人を理解するかたちが変れば変わるほど又 A ということが起るのである。

つまりひとを「理解」するということは、このように一方的にAがBを理解する様式だけではなく、逆にAが自分を理解する様式としてもあるような、そういう相互変容の様式としても存在していたのである。

だから単純に理解とは第一第二第三の理解様式として理念化できますよ、と言つてすませられない所があつて、それが「理解」といふもののもつ根本的に不気味な構造になつていふことをここでどうしても指摘しておきたいのである。

これが理解というあり方の理解しにくい面なのである。つまるところ「第四の理解様式」といったものが、そこから設定されなければならなくなるのである。それは「理解とは究極的には理解できない様式としてある」といふ理解の仕方である。

私たちは人の自伝や人の身の上話を聞いて、その人のことがよりよくわかつたような気になることがある。しかしそうして「わかつた」と思う時は、必ず第一から第三までのどれかの様式で《解釈》している時である。その時は「わかつた」と思つたことでも、しばらくすればその「わかつた」時の鮮明さは薄れて、「わかつた」ことの中味もあいまいになつてくる。そしてまた

いつかそのことのわかり直しをしなくてはならなくなる時がくる。

つまり私の方の状態において、元気がなくなり、若さがなくなったりするだけで、かつて「わかった」と思えたことが色あせて、自分に関係のないものにみえることがあるほどに、「理解」は「私の側」の問題と関係していることがわかってくる。つまり客観的でシ上の理解の様式などというものは存在しないということなのである。いつか「理解」は私とともに薄れ、あいまいになっていくのである。そういう側面をもつものとしての「理解」の理解を私は第四の理解様式と呼んでみたいのである。私はこの第四の理解様式を第一から第三までの理解様式とは別格に考えようとは思わない。

そうではなく理解のもつ性質として、第一から第四までを私は等格であるように考えてゆきたいのである。

だから端的に言えば、理解とは理解できる様式であるとともに、理解できない様式でもあるのだということになってくる。もう少し違ったふうに言えば、私は人や自分を理解することはできるが、それはあくまで理解できる様式スタイルによつてである場合であつて、私は又人や自分のことを理解できないし、できなくなつてゆくし、またしていない、という側面ももっているのだということもちゃんと理解しておきたいのである。

もっとハッキリと言えば、私は「理解」という様式を用いた時だけは理解できるが、多くの場合私たちは、理解という様式を用いないで、「理解しない」という形で理解しているようなこともあるのだということなのである。

(村瀬学『理解のおくれの本質』による)

問1 傍線部(1)「人を理解するというのはどういうことなのだろう」とありますが、筆者はどのような結論を出していますか。もつとも適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。(解答番号は 1)

- ① 第一の理解様式から第四の理解様式までの四つの様式を駆使して理解に努めているということ。
- ② 第一の理解様式から第四の理解様式までのどれか一つが欠けると理解は得られないということ。
- ③ 第一の理解様式から第四の理解様式まで、この順序通りに進むことで十分な理解が得られるということ。
- ④ 第一の理解様式から第四の理解様式まで、理解度の優劣があつて、それは自分の成長に応じて変化していくということ。
- ⑤ 第一の理解様式から第四の理解様式まで、それぞれの様式によって理解の仕方が異なってくるということ。

問2 傍線部(ア)「立ちイ振舞」、(イ)「シ上」とありますが、カタカナ部分を漢字に直した時と同じ漢字を含む熟語を、次の

①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。(解答番号は(ア) 、(イ) )

- (ア) 立ちイ振舞 ① 入国 ② 居所 ③ 正座 ④ 衣類 ⑤ 地位  
(イ) シ上 ① 支援 ② 夏至 ③ 実施 ④ 歴史 ⑤ 市価

問3 傍線部(2)「『悪い人相』としての理解の仕方が変わってくる」とありますが、どのように変わるのですか。もつとも適当

なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。(解答番号は )

- ① 複雑な家族構成の中で育つと必ず人相が悪くなり、その修復は不可能だと思えるようになる。  
② ホホの傷で人相が悪くなったが、若者にはありがちだと思うようになる。  
③ 人相が悪くて性格が悪い人もいるが、悪い人相でも性格のよい人はたくさんいると思うようになる。  
④ 一目見て人相が悪いと感じた相手は、こちらも人相が悪いと感じているはずだと思うようになる。  
⑤ 人相は悪いけれども、喋り口調や服装は悪くないので、この人は悪い人ではないと思うようになる。



問4 傍線部(3)『あなたの過去など知りたくないの』というところで理解されるものの真実も又ある」とありますが、筆者はどんなことを言いたいのですか。もつとも適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。(解答番号は 5)

- ① 「歴史」を失って「現在」に生きる相手だけが真実の理解をもたらす。
- ② 偽りの「歴史」を知らされることで真実が歪められることになるような理解様式は存在しない。
- ③ 相手の「現在」だけが真実であるような理解の様式も存在するのである。
- ④ 相手の「歴史」を知ろうとしない姿勢が正しいと言えるような出会いがある。
- ⑤ 相手の「歴史」を知ることによって「現在」が歪められることが真実であるようなことはない。

問5 傍線部(4)「その逆もそうである」とありますが、どんなことですか。もつとも適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。(解答番号は 6)

- ① その人の持っている大事なものは、「現在見えるもの」の中には現れてこない。
- ② 現在を脇において、過去だけで人を理解することはできない。
- ③ 過去を問わないで現在だけで人を理解することが可能である。
- ④ 過去の中で作られてきたものは、その人が現在持っているものと異なる。
- ⑤ 過去は過去として、現在は現在として理解していくことが大切である。

問6 傍線部(5)「理解される相手の位置づけられ方も違ってくる」とありますが、どのように違ってくるのですか。もっとも適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。(解答番号は 7)

- ① 第三の様式で理解された赤ちゃんは、第二の様式では理解することができなくなる。
- ② 喧嘩した後は恨んでいた相手も、時間が経てば憎らしく思わなくなる。
- ③ 第一の様式で理解された相手のイメージは、第二と第三の様式によって変容することはない。
- ④ 赤ちゃんを見る目は、その母親と他人ではずいぶん異なっている。
- ⑤ はじめ人相が悪そうに見えた相手が突然、好人物に映るということはありえない。

問7 傍線部(6)「そういうこと」とありますが、どういうことを指していますか。もっとも適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。(解答番号は 8)

- ① 人が人を理解するということ
- ② AがBの過去に気付くこと
- ③ 一輪の花を見て生を感じとること
- ④ AがA自身の三つの相を理解すること
- ⑤ 理解には三つの様式があるということ

問8

空欄

A

にはどんな言葉が入りますか。もつとも適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。(解答番号

は

9

)

- ① 自分を理解するすじ道も変ってゆく
- ② 人の痛みが自分の痛みにもなってゆく
- ③ 人を理解することの奥深さを感じるようになる
- ④ 自分がまだ何も理解していないことに気付く
- ⑤ 理解する様式があまりに複雑なのに気付く

問9

傍線部(7)

「不気味な構造」とありますが、どのような点を不気味な構造と言っているのですか。もつとも適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。(解答番号は

10

)

- ① 人を理解しようとする行為には絶えず畏れが伴う点
- ② 相手へのイメージが、深く知ることです大きく変わること驚く点
- ③ 相手のことを知れば知るほどさらに奥があることに気付く点
- ④ 理解された相手の内面と自分の内面があまりにも似ている点
- ⑤ 理解しないという形で理解しているという理解がある点

問10 傍線部(8)「理解とは究極的には理解できない様式としてある」とありますが、どんなことを言いたいのですか。もつとも適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。(解答番号は 11 )

- ① 人が人を究極的に理解することは、相手との関係によって決まるのである。
- ② 自分の肉体的・精神的状態により理解の中身が変容するものである。
- ③ 理解していると思つた瞬間に理解していない部分の存在に気付くのである。
- ④ 理解していない状態が続いていくことが、すなわち理解することなのである。
- ⑤ 究極的な理解というのは、第一から第四の様式によつては達成されないのである。